

# ウクライナ避難者支援

## のための情報共有会議

### — 第23回議事メモ

日時：2024年6月24日(月)18:30～20:30

場所：オンラインzoom

参加者：34名

\* 団体、個人名については敬称略にて掲載しております。

# 開催挨拶

あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク/  
認定NPO法人レスキューストックヤード(RSY) 代表理事 栗田暢之

情報共有会議は本日で23回目。当初は、避難して来られた方にどう生活していただくかという話を中心に本会議では話し合ってきた。避難から2年以上が経ち、日本では避難者に対する関心が薄れてきていると言わざるを得ない状況である。しかし、本当に残念なことであるが、現在も戦争が終わっていない。また現在も避難して来られる方がいらっしゃり、生活していくうえでの困難な状況は続いている。本日のテーマは「ティーン世代の教育／キャリア支援」日本で安心して生活していただくために必要なことを、皆様と一緒に考えようという趣旨である。会議の案内は様々な方に行っている。官民様々な方にご参加いただき、それぞれが持てる情報を共有し、互いの支援活動の過不足を補い合ったり、避難者が抱える課題等について意見交換するなどして、今後のより有益な支援につなげることを目的としている。本会議の場を有効活用頂いて、支援の輪を広げていきたい。

なお、私は、認定NPO法人レスキューストックヤード(RSY)の代表理事であるが、RSYは「あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク」の事務局を努めさせて頂いている。昨日の総会で、今年度も引き続き事務局としてできる支援を行っていくという総会決議が可決された。今後もできる支援をしっかりと行っていきたい。

# 自治体、支援団体からの報告と質疑

<愛知県 多文化共生推進室 都築さん、杉本さん>

6月1日現在の避難民の人数について、愛知県内は名古屋市はじめ11市において121人79世帯。

愛知県の生活支援事業について、前回の会議で報告した内容と変わりはないが、次の4つを行っている。

①生活一時金の支給。生活用品等を購入するための費用として1世帯20万円。3人以上世帯は10万円を加算。

②日本語学習に必要な物品(SIMカード)の支給とタブレット端末の貸与。カードは30日間有効で50GBのカードを一人につき5枚支給している(ひと月に1枚ずつ)。

③寄付物品の受付/配送。ウクライナ大使館が(株)コケナワと連携して構築した「ウクライナ避難民と支援したい人とをつなぐ情報プラットフォーム デジタル大使館」を活用。愛知県は(株)コケナワに業務委託し、寄付物品を避難民に配送している。

④避難を余儀なくされた方を支援するための寄付金の募集。24年9月30日まで募集期間を延長している。寄付金は生活一時金やプリペイドカードの支給等にに使わせていただいている。

●寄付金に関して、今年度は昨年度以上に厳しくなっている。物品配送に関しても、具体的な企業等からの申し出もなく厳しい状況である。

<名古屋市 国際交流課 西川さん>

先月末時点での避難者の人数は80人、前月と変更なし。名古屋市では、寄付金を財源にRSYに個別支援を委託するというフレームである。また、市民から、寄付をしたい、イベントに招待したいという場合のマッチングもRSYに委託している。最近も鯉城学園OBによるチャリティーコンサートなど様々なイベント招待があり、避難民の方にとって少しでも癒やしの時間になればと思っている。

最近の課題について。外国ルーツの子どもたちについて、小学生などの場合は学校に慣れやすいということが避難民に限らずあるが、年齢があがってくると地域生活に溶け込みにくい、アイデンティティが確立しにくいという課題がある。本日の会議テーマとなっているため、興味深く拝聴したい。

# 自治体、支援団体からの報告と質疑

<名古屋入管 在留支援部門 中野さん、小林さん>

本年4月以降、入管の支援制度の変更等はない。ウクライナ避難民の受け入れ状況として、HPIにも記載しているが、5月末時点で全国で2631人(男性751人、女性1880人)、さらに帰国した方を除く在留数は2022人。

補完的保護対象者認定制度が昨年12月にスタートした。ウクライナからの避難の方も対象者となっており、申請のうえ認定された方は、原則、在留資格を定住者に変更可能とし、引き続き日本に定住できるという制度である。また、認定者は「定住支援プログラム」を受けることができる。プログラムは半年に一回実施されていて、10月スタート分については申込みが8月×切となり、難民事業本部(RHQ)のHPIにて詳細を案内している。入管としては、補完的保護対象者の方が制度をすぐに利用しやすいように、来日時に、空港で案内をして活用していただけるようにしている。

# あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク活動報告

(事務局:レスキューストックヤード( RSY)加藤)

●最近の避難者の状況を伝えたい。

・補完的保護対象者認定制度を申請する方が大変増えており、実際に認定を受けている方も多くいる。政府は避難者への支援から定住者への支援に切り替わってきている。避難者自身も今後について口にされる方が増えてきた印象。

・日本の大学に通うことを考えている若い世代の方。本国の家族が心配なので帰国を検討している方。自身も今後の道を模索しているといった声。子どもについても、日本の学校に通っている方もいるが、年齢とともに日本の学校に通うのが難しい方もいる。日本の学校に通えていない方は今後について懸念の声が聞こえてきている。日本にこのまゐることを選択するのか、本国に戻るのか。一時帰国して検討するのか…といった選択に大変迷っている。さらに、一つ決めて選んだとしても、1か月後に同じ選択をするかどうかは、私たち戦争を体験していない人にとっても迷うことだが、戦争が終結していないウクライナの方々にとっては当然決定が変わることであり、前と言っていたことと違うということがある。

・定住者の在留資格を得られたとしても、本当に定住するのだろうか、確定できない辛さをひしひしと感じる。

・上記のような悩みを抱えているの方々に対し、支援者として何ができるのかを考えた時に、JUCAがウクライナ人としてできる支援を行っている。隣で拝見していて、レストラン、母語教育、ウクライナ人同士の交流など、皆さんにとって大事なサポートをしている。

・私たちにできることは、手続き、習慣、学校など生活の中で様々な存在している日本ならではの独特なものをお伝えできること。日本人との交流の機会を作ること。一人一人ニーズが違うので、耳を傾けて聞き逃さないようにしたい。定住を考えた時に、1～10までのサポートではなくて、手続き一つにしても、自分でできる、自立できるようなサポートをしなければと考えている。

例:国保の減免申請。6月に通知が届き、急激に請求額が上がったという声があった。減免申請をすれば大丈夫と伝えたものの、区役所での手続きの最中は私が進めていってしまった。後に、減免申請をしなくてもよい方法は?と聞かれ、確定申告の仕方を知りたいと前向きな発言があった。そうしたサポートを丁寧に行っていくこと。

・戦争が終わっていない中で、定住を考えなくてはならない辛さ、心理的な負担は減ることはなく積もっていくばかり。その中で一時でも癒しとなるイベントや交流会は、今だからこそ大切なことだと思う。現在も、イベント招待や新規で支援登録をしてくれる方もいる。皆さんのお力をお借りして、必要なサポートをしていきたい。

# JUCA (NPO法人日本ウクライナ文化協会)

理事長 川口プリスリュドミラ 副理事長 榎原ナターリア

・レストラン「ジート」を先月無事にオープンすることができたが、大変忙しくなった。働く場だけでなく、美しい文化や伝統を体験して頂きたいと考えレストランを開店した。今後も笑顔で楽しく広めていきたいと思っている。続けていくために資金が必要。クラウドファンディングをしているので、お力添えをお願いしたい。

[https://www.oco-s.jp/project/juca?fbclid=IwZXh0bG9hZWMTEAAR2RtTqgwpi0JSII6WfSixQDrkOp0wTH2m0GhpTK7C5hO9SY7qsRTIGU6cc\\_aem\\_YQ7kr4cC9LPmwFcSymUDpw](https://www.oco-s.jp/project/juca?fbclid=IwZXh0bG9hZWMTEAAR2RtTqgwpi0JSII6WfSixQDrkOp0wTH2m0GhpTK7C5hO9SY7qsRTIGU6cc_aem_YQ7kr4cC9LPmwFcSymUDpw)

●名古屋で住む人も増えていて、引っ越しのサポートをしている。

●チャリティピースコンサート@三重、他のイベント:4/28、津市で開催されるイベントに参加。ダンスや物品販売等。他に、4/28はpeace for ukrainのデモ@栄もある。

●ヨガクラス:大人のヨガクラスも継続している。体にも精神的にも良い。先生が色々なテーマを考えて新しいこと、面白いことを教えてくれている。ウクライナ避難民は無料、在日ウクライナ人や日本人は有料だが受講可能。興味のある人は声をかけてください。

(進行より)みなさんが能登から帰ってきた時に出迎えたが、興奮冷めやらぬ熱気がすごかった。クッキーを100枚焼いたという避難民の方もいっしょに素晴らしい支援だった。

# ウクライナ避難者ティーン世代の教育／キャリア支援

◆進行: 神田すみれさん(あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク コアメンバー)

ウクライナからの避難が長期化する中で、難民特有の課題もあるが、日本社会の中で移住者の方々が経験してきたことと共通することがあるのではないかと、役に立つこともあるのではないかと考え、今回のテーマを設定した。お二人の経験豊富なゲストにお越しいただきお話を伺っていきたい。

・子ども／ティーン世代は、自分で計画して避難を決めたわけではない「いつか自分は戻るだろう」「本当の生活であれば、こんな経験をする必要がなかった。」「本来の自分はこうではない」「自分の国だったらこんな成績をとるはずがない」、この思いはおそらく本当のこと。これが1年～5年、10年続いている人を見ていると、今ここで生きていけないといけないという思いになるまでにどう寄り添うか、一緒に悩んで腹をくくるところまでいくか。戦争がすぐに終わるかもしれない、帰れるかもしれないという思いに寄り添うのはとてもしんどいこと。今は定住者も増えてきたが、以前は、日系人の方たちも数年で帰るんだという思いを持ってきた方たちも多かったので学べるのではないかと。

・日本の教育に対する考え方、職業観、キャリア構築、教育に対する考え方も国によって随分違う。分かりやすいところだと履歴書を持って面談するというプロセスも日本では当たりまえだが国によって違う。(逆に履歴書を使う国はどれくらいあるのか・・・)

・中学・高校など所属するところがない、二十歳前後の若者たち、属するところがない人がウクライナの方々に限らず増えてきている。しかも単身で来日している人もいる。帰るところがない、自分がどうするのか決められない中で、よりよい仕事、支援、資源があるところを求めていくのだが、(例えば30代と違って)10代の若者は生きてきた年数に違いがあり、判断基準がない中で、すごくさまよっている印象がある。所属するところがない海外出身の若者たちを、サポートが限られている中、これまで日本社会でどうサポートしてきたか、ゲストを迎えてお話ししたい。笹山先生は、定時制高校の現役の先生でもあり、属するところがない、学校に行く年齢を超過している若者と多く接している。金箱先生は、愛知県教育委員会の語学相談員として多くの小中学校を長年経験されてきた。また継承語教育の研究をされているのでアイデンティということも少し触れていただきたい。メインは、来日してまもない若者者はどんな選択肢があり、何を基準に進んでいけばよいか、周りのサポートはどうしたらよいかという観点のお話を伺いたい。

# ウクライナ避難者ティーン世代の教育／キャリア支援

## ・金箱さん自己紹介

2022年まで愛知県教育委員会尾張教育事務所に所属し、小中学校 40校程を巡回しながら、主にスペイン語圏の子どもたちの支援を行ってきた。その前は高等学校教育課で3年程、全日制の高校に毎日入りこんだり、定時制高校の通訳などを行ってきた。現在は、博士後期課程で継承語教育の研究を行っている。子ども達が家で使う言葉がアイデンティに関わってくるので、どう継承していくか、言葉は文化と深く関わるので、日本と母国の文化を重ね合わせながら自分らしさをどう見つけて生きていくのか、という研究をしている。現在、瀬戸市でスペイン語ルーツのある子どもで日本で小さい頃から暮らしている子どもたちのスペイン語教室を開催している。本日はそのような経験を皆さんと共有したい。

## ・笹山さん自己紹介

高等学校の国語科教員として5, 6校を歴任してきた。定年退職して6年になる。最後に、明和高校の夜間定時制に赴任し、ふたを開けたら半分くらいが外国人だった。そのため、日本語教師の資格を取得。国語の授業だが、日本人と同じ教科書に苦労している外国人の生徒を目の前にしつつ、日本語教育を意識した授業内容にしている。現在は週3日アルバイトで明和高校に行き、若者たちと文化祭の出し物を一緒に考えたりして楽しい日々を過ごしている。

夜間定時制と言っても、きちんとした支援を受けられない場合には、日本語で教科書を読んで勉強するのは非常に困難。あっという間に学校に来なくなり中途退学する子どもたちが増えている。現場の教員も悲しい。この問題は、学校現場だけでは解決しきれない。明和高校に一番学生を送り込んでいる大曾根中学学区に、2020年に「愛知夜間中学を語る会」という母体を立ち上げた。会が主催し、支援する形で「愛知自主夜間中学はじめの一步教室」を開催。自主なので、皆ボランティア。内容は、義務教育の勉強を地域で保証しようというもので地域の中での学びのセーフティネット。当初5名だったが現在300人超え、上飯田東町と大曾根、引山、金山の計4つの教室。それぞれ種が飛ぶように拡散、地域の課題に応じて支援するという形で展開している。



# ウクライナ避難者ティーン世代の教育／キャリア支援

◆神田: 来日して間もない方が進学をする場合に、制度を含めてどういう選択肢があるのか。情報を含めてお話を聞きたい。

●金箱: 来日1-2年の場合、外国人選抜を行っている高校があるのでまずは近くにあるかどうかを確認して欲しい。外国人選抜の要件に該当するかどうかを確認する必要がある。外国人生徒が多く在籍する学校であれば、外国人選抜制度などの情報をもっているが、そうでない学校の場合は、先生が制度を知らないことも多い。情報を学校、保護者、本人に伝えることが大事。外国ルーツの子ども達は定時制に行く根強く考えられている。尾張地域では、来日2年だとしても、それ以外の選択肢があることをきちんと伝えていく。お金の問題から公立高校を選択する子どもも多いが、私立高校の選択肢もある。公立でも定時制だけではなく、全日制、昼間定時制がある。昼間定時制の中には、外国人児童生徒の受入に積極的な高校も名古屋市にある。経済的に厳しかったり、日本語学校に昼間通って夜間定時制に行くという選択肢もある。私立の学校の中にも、専修学校といって仕事に結びつく勉強ができるところがある。今までだと「外国人＝この情報」と支援する側が思い込んでいることがあるので、一旦すべての情報を説明する。

もう一つはお金の問題。愛知県内には奨学金を使って、私立の学校でも全日制より少し高い程度の授業料で抑えられる学校もある。日本人の家庭も多くの世帯がこの制度を使って私立に通っているのだから、そのことをきちんと伝え、どんな制度がなのか説明し、実際に学校を見に行くというところまで繋げたい。

◆神田: お金など手続きの説明は実際にはどのように行うのか。

●金箱: 例えば中学1年で来日したとして、その説明は早ければ早いほどいい。もちろん通訳をつけて説明する。先生は「分からないことは何でも聞いてください」ということをやりがちだが、当事者は「何がわからないかがわからない」ため、質問ができない。まずは、日本の教育制度を説明することが大事。例えば、ペルーには高校がないので高校入試という意味がわからない。何年間通うのか、何月に始まるのか、中学校が決めてくれるのか、自分で選ぶことなのか。日本人は当たり前と思って説明しないことが多い。私は「かわいい制服を着ているお姉さん見たことある？あれが高校生だよ。勉強したかったら高校に行くんだよ」というように子どもや保護者の生活経験を使ってイメージしやすいよう説明している。「前にも説明したよ」と先生が言っても、中1の時から何度も何度も違う角度やエピソードで説明する。学校だけでは限界がある。コミュニティやNPOに繋げる。NIC就学説明会に行き方まで教えて繋げる。教育制度やシステムを色々な場で保護者や子どもが自分たちで理解できるようにつなげることが大事。

# ウクライナ避難者ティーン世代の教育／キャリア支援

◆神田：高校に進学した後のこと。地域としてどう伴走するか。高校に進学した後どう支援するか。

●笹山：外国人の子ども達が1万人強、多い地域が愛知県。当然、中学校などで先の見通しを建てた進路支援をされているだろうと思われるが、現場はとてつもなく人手不足。学校によっては、外国人の子ども達には手が回らない。日本人も含めて不登校が激増している状況で、先生たちは現場でアップアップしている状況。一人一人に寄り添った子どものパフォーマンスを引き出せる対応がどれだけできるか。うまく、背景を汲んで寄り添ってくれる先生がいるか、マンパワーにゆだねられている状況。自身の孫も中2だが、今年度のWEB出願に代わり、外国人の子どもが読み解くには難しすぎる。

入学してからも、外国人入試を設けている学校であっても、例えば進学実績のあるような学校は日本語ができて当たり前。取り出し授業をやらしてもらえが、ある程度レベルが上がると、すぐなくなる。背中を押してもらえるということではあるが、追いつけない子どもが落ちていく。外部から見て体制ができてい学校でも、授業そのものが非常勤講師に任せっぱなし。日本語支援と教科支援が結びついていない学校が実際には多い。こういう制度があるから大丈夫と一口に言えないと私は思っている。

◆神田：まさに共感するところで自身も経験がある。高校に入れた後に「もうやめることに決めたから、学校行けなくなっちゃった」と言われる前にどう伴走できるか。どういうことが地域の支援者としてできるか。

●笹山：これまでの経験から、学び合いの力はすごく大きい。私達は情報を持っているが、彼らの背中を押してあげられるのは同世代やちょっと先輩の人たち。彼らの苦しんだ体験、成功体験を共有してもらい、まるごと学びあえる仲間、ゆるやかな居場所が必要。

学校の期間ははすごく短いスパン。この短いスパンの中でやっていけないというところで心が折れちゃう子が多い。地域の中で少しずつ、欠けているものを補いながら、ゆっくり少しずついいから自己実現していける伴走できる支援者がいたり、相棒や仲間、拠り所がいくつかあるといいと思う。

●神田：選択肢を私たちがどれだけ作れるかだと思う。

# ウクライナ避難者ティーン世代の教育／キャリア支援

◆神田：ウクライナの子ども達の中で、母国のオンライン授業を続けている子どもたちがいる。すぐに帰国するからということで、オンライン授業のみで同年代との交流が全くない子どももいる。どんなことができるのか。

●笹山：ほんとに一人一人違う。私たちも私たちだけではできないことを自覚している。複数教室を分けた中で「草の根支えあいプロジェクト」と一つの教室が繋がった。地域の専門家が時々来て関わってくださることになった。誰がうまくマッチングするかわからない。いろんな人が関わる中で、この人とだったらマッチングできるという顔合わせの場を作ることもできるのでは。例えば、家庭科の先生で刺し子（刺繍）の先生がいたり、こういう手仕事で繋がれないか。勉強だけではなく引き出していくなかで人のつながりを作る。刺繍の話から進んでクラフトバック作ろう、夏休みに体験会をしようという話で盛り上がった。うまくはしごかけしてあげて、かかった時にお尻を押してあげるようなことが大事。今まで支援を受けていた自分の視点を逆転させて、支援できるという気持ちになってもらうこと。日本で支援を受けているばかりで、彼らのプライドはズタズタ、悔しい気持ちでいっぱいだと思う。私たちの教室は、学習者が支援者になることを大切にしている。そこに行けば楽しい、緩やかに繋がれること、緊張する必要はないよということを場づくりの中で心掛けている。ある日「学習者」だった人の顔つきが変わる瞬間がある。それがアイデンティティを守るきっかけになる。

●金箱：これまで学校に通っている子どもたちと接してきたので、通っていない子ども達については接点が少ないが、経験の中で、「高校に行けなかった」「本当は通いたかったが保護者が必要ないと通えなかった」というお子さんも毎年 1人位は出てくる。その後に出ると、孤立していると感じる。工場で働いている子どもが多く、16歳で工場に入ると使われっぱなしという印象（出勤したのに、仕事がないから午前中で帰宅、週3日しか仕事がない等）自立できる条件での仕事を見つけることができない。18歳になった時に、やっと正社員になれた家を出られると話す子どもが多い。そういう子たちにどう支援ができるか、自分も考え続けてきた。

中学校の子どもたちへの学習支援をしながらでも笹山先生が仰っていたのと同じような瞬間がある。子ども達はずっと勉強できるようになりたいといつでも思っている。日本語ができるようになりたいと思っている。一方先生は「この子はいつになったらスイッチが入るのか」と言う方もいるが、子どもたちはやり方がわからないだけ。日本語を話せるようになるのは 2年くらいだが、学習言語が追いついてくるのは 5年くらいかかると言われており、すぐにできるはずはない。自分で学習ができるようになるまで本当に時間がかかる、その瞬間までどうやって支援していくか。

# ウクライナ避難者ティーン世代の教育／キャリア支援

子どもたちがぱっと輝く瞬間は本当に些細なことでも起こり得る。例えば、以前自分が関わっていたボリビアの子どもに「私もっとできるはずなのに」、「私バカになっちゃった」と言われた。母国では英語が得意だったのに日本に来たら 20点しか取れない。そのようなときに、私が「あなたは賢いよ」と言っても響かない。そこで、先生から設問をもらってスペイン語で伝えテストしたら 68点だった。

彼女は疑問文等の漢字がわからなかっただけ。そのときに彼女の目が輝いて「私すごいじゃん」と言った。「そう、あなたはすごい。問題は日本語だけ。何ができるか先生呼んでくるから一緒に考えよう」と言った。そうすると、彼女からも発言できるし、先生もどうしたらよいか一緒に考えてくれるようになった。支援される側だけじゃなくて実は、自分もなにかできると感じる。さらに、先生に困ったことを伝える中で(スペイン語は似てるのかという気付き)もあり、彼女もなにかできると感じた。先生と生徒が上下ではなく、横になれる瞬間があると、先生も子どももすごく輝く。先生たちもすごく忙しいが、子ども達のことをすごく考えてくれている。そういう瞬間を作るのが私の仕事。自分がいなくて機能するのが一番だが、言葉じゃないところでどう支えるか、これは地域の方もできること。普通に声をかけてくださるなどもすごく大事。子どもが「私って実は・・・」という瞬間が訪れたら、社会との接点やアイデンティ、自分のことを前向きに考えていくことができる。

●笹山: 一人一人が地域の中で尊重される空気が必要。戦争からやむなく避難されてきたので支援しなければということも大事だが、これからは、地域住民の一人として他の国の人、いろいろな事情を抱えている日本人もいる中で、一人ひとりの力が必要。協力しながら一緒に社会を作っていこうという空気感を作らなくてはいけない。

# ウクライナ避難者ティーン世代の教育／キャリア支援

◆神田：JUCAでも、定期的にウクライナにルーツがある子どもたちが集まって、勉強したり一緒にごはんを食べたりという継承後に関するプログラムを行っているが、継承後教育の重要性とその考え方について、金箱さんから伺いたい。

●金箱：＜継承後教育とは＞保護者の母語が継承されていくことを言う。日本は日本語が強い社会なので、日本にいと日本語が強くなり、母語も話せるのだが日本語よりも苦手な言語になってくる。言語が形成されるのは 9歳～10歳前後。それ以前で来日した場合は、日本語が強くなるのは当然の現象。継承後の難しいところは、保護者などが気をつけていないと、簡単に無くなってしまふ。早い子は数カ月で話せなくなる。今後日本社会で生きていくのだからそれでいいだろうという意見もあるが、話せなくなることにより、家庭内で孤立する。学校の勉強も孤立、社会も孤立、家庭内で孤立が起きることになる。保護者は普通にその言語を学んできたので、なくなるということについて理解できない。ついついマイナスで考えてしまう「なんで言えなくなってしまったの?」。それは、子どものアイデンティに関わる。「日本人になりたい」「その言語を話すことが恥ずかしい」となってしまう。そのため、そのようなごはんを食べるイベントなどを通して、その子のできることを見ていくのは大事。ウクライナ語も日本語もできる子、いろんなことを柔軟に考えられる子というよい面を引き出していくと、子どもたちは居心地がいい場になるのではないか。私の子どももスペイン語を 4カ月で失ったが、取り戻すのに 10年かかった。失うのは本当に早い。なので、周りの大人、日本人が(ウクライナ語って素敵だよ、教えて)言葉の意味や素晴らしさを伝えていくのが大事なのかなと思っている。

◆神田：属するところがない若者(就学年齢を超過している若者)の支援について伺いたい。

●笹山：二十歳前後の属するところがない人の支援難しい。「草の根支えあいプロジェクト」がよくご存知なのは、LINEなど、いろんなチャネルを持っていて、つかず離れずいつでも話してもらえる雰囲気を作ること。教室にそういう方が来たときは普通に話しかける。「何やりたい? やりたいことがなければおしゃべりしようか」相手を知らないと先に進まない。ぬくもりを求めてきていることが多いので、お茶お菓子食べながら、スタッフは仕事の手を休めずに、チラシを折ったり、漢字カードを並べたり一緒に作業をして手持ち無沙汰にさせない。仕事を割り振りながら「ありがとう」という場面をたくさん作ること。感謝の気持ち、プラスのメッセージをたくさん作り「ここに来ればあなたがあなたでいられる場所だよ」というメッセージを出しているいろんなことをやってもらう。小さい子のお世話など遊んでもらうことも大事な仕事の一つ。自分ができるところに目を向けてもらう。「よくきたね、ありがとう、またきてね」といつも声に出すことが大事。

◆神田：これまでの経験がウクライナの若者、子ども達に活かされるようになるといいなと常々思っている。ありがとうございました。

# ブレイクアウトルーム共有

ブレイクアウトルームに分かれて、気づき、質問などを話し合った。各グループ毎の概要は以下の通り。

①外国の方とのコミュニケーションでは、言葉が通じなくても、相手の言葉を少し入れて、にっこり微笑むと喜んでくれる。子どもの理解をするには、親の理解が必要。その後適切に繋げるシステムづくりも大事。

個別支援をする中で、言葉を通じて共感することは大事。正確に伝えることはとても難しくもどかしさを感じるが、言葉を通して短い言葉でも共感することは大事。改めて笹山さんより、子ども達は日本に来たときに家族の事情で来ている。子どもの心の痛み、背景を理解すること。理解するためのいろんなきっかけ、しかけを考える必要があると話した。

②ものおじしないバイタリティーを持っている人と、一方、こんにちは以上の話しかけられない人(自分も含めて)の壁がある。近所のおじさんが暑いね、ごみの日でくさいねなど気軽に外国人に話しかけている。金箱さんがおじさんに気軽に話しかけられる理由を聞いたら「わからん」と言われたが、そのおじさんのように勇気をもって話していくこと、自分も含めて日本人が心がけなければということを決意した。お母さんのサポートが大事ではないか。現場ではスクールカウンセラーが橋渡しをすることもあって大事な視点だという話をした。

③刈谷のワールデンという畑(定期的に誰が来ても農作業ができる畑)に関わっているが、身近にそういうところがあればいいのではという話をした。知立の日本語教室にも、親の仕事の都合で日本に来ている子どもが「望んできたわけではない」と世話人に不満をぶちまけている場面に遭遇した。世話人の人がそうした思い汲んでティーンが喜べるようなイベントを開催していてそういう取り組みが地域にあるといい。

④感想や質問の共有をした。親へのアプローチ、どこまで教育に理解があるかがポイントになってくる。どれだけ周りでいい人に出会えるか、きっかけが重要。教えられる側から教える側になる瞬間。オンラインで授業を受けてリアルな接点がない。戦争の影響でどの言語が継承語か言いづらい複雑な環境にある。それを踏まえてより時間をかける必要がある。信頼関係を築く前に親が出てきてしまって子どもが実際どう考えているか子ども自身の意見を聞くことが難しい。ダブルリミテッドが悪いこと、課題と言われているがそうではなく、本人がその状態に直面しているということを認識し、制限されている言語を意識的に勉強することで将来の可能性が広がっていくこともある。日本人も外国人もキャリア教育、将来どんな可能性があるか早いうちから学んでいくことが大事と話した。ブラジル日系3世の子ども達が、いま会社で活躍してくれている。保護者の理解、いい先生、先輩がいたというのが彼らに共通するところ。どう支援していくかという中で子どもであっても一人の人間として向き合うことが大事。

# ブレイクアートルーム共有

突然日本にやってきて、保護者の通訳でブリッジ人材になったことで、自分自身の存在価値が芽生えることもある。環境によって生き方が変わる、自分の今いる場所で最善を選択できるために周りが居場所を作ること。ブラジル人の子ども達は教会で先輩と出会う中で情報を得るといったケースが多かった。ウクライナの子どもたちがどこで出会える場を作るかということ。また教員の友人たちが多くいて、一人ひとりは一生涯懸命でも限界がある。行政が予算で海外人材に特化したスクールカウンセラーをもっともっと入れる必要がある。現在は、私立大学でもほとんどが留学生に特化したキャリア支援をしている。時代とともに環境整備が行われているので行政にもっと力を入れてほしい。

⑤東京の三鷹でボランティアで日本語教室をしている。継承語教育の話をする中で、JUCAの榊原さんから母の役割が大変重要という話があり印象に残った。日本語教室では日本語を教えよう教えようとしてしまっているが、自己肯定感を上げるような母国語を大事にするような対応がすごく大事だと気づかされた。

金箱さんコメント:外国人支援、被災者支援など分けるのではなく、皆が共通でもっている思いがある。核となるものを共有することでもっと良いことができるだろうと思った。

笹山さんコメント:研究者でもなく普通の人間だが、人が好き、命は大事、いなくていい人はいないという気持ちを皆が持っていれば、世の中明るくなると思う。その自分の感覚を信じて、周りに拡散できるといい。みんなが好きといえば繋がれると思っている。

# ウクライナ避難者支援のための寄付にご協力をお願いします

郵便振替00810-7-215694 口座名義:レスキューストックヤード

(ゆうちょ銀行以外の金融機関からのお振込み)

ゆうちょ銀行(金融機関コード: 9900)・〇八九(ゼロハチキュウ)店(店番: 089)

当座 0215694 口座名義:レスキューストックヤード

※領収書は認定NPO法人レスキューストックヤードからの発行となります。